

平成24年度宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成24年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成25年3月14日(木) 17時30分～19時30分
場所	宇治市役所 6階 602会議室
出席者	<p>(委員) 榑原会長 宮脇副会長 佐名田委員 能勢委員 部委員 吉田委員 田邊委員 伊家委員 荻野委員 小谷委員 鶴飼委員 村上委員</p> <p>(事務局) 石田教育長 中谷部長 村田教育部次長 藤原教育部次長 山下教育改革推進室長 上道学校教育課長 富治林小中一貫教育課長 市橋教育指導課総括指導主事 瀬野小中一貫教育課総括指導主事 吉田小中一貫教育課計画推進係長 米田学校教育指導主事 妹尾小中一貫教育課主任</p>
欠席委員	坂井委員、大槻委員
配布資料	資料 平成24年度第2回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書
1 開会	<p>・石田教育長 開会挨拶</p>
2 報告及び協議事項	<p>(1) 報告1 全面実施1年目の取り組み状況報告書 資料(3～12頁)に沿って事務局より説明。 質疑応答等</p> <p>(会長) 事務局から、小中一貫教育全面実施の全体に係る説明があったが、より具体的にイメージするためにも、チーフコーディネーターを担当している委員からも詳細に係る報告をお願いしたい。</p> <p>(委員) 1 中学校2 小学校で構成される宇治中ブロックでは、12の専門部会を設けており、1つの学校で4つの専門部会を主として担当している。今年度のひとつの事例を挙げると、小学生の部活動体験の充実を目標とし、従来から取り組んでいた中学校陸上部による小学生への駅伝指導や、小学校鼓隊クラブと中学校吹奏楽部との合同練習に加え、中学校男子バレーボール部が小学校に出張しての部活動体験を実施した。今後もさらに部活動体験の充実に取り組んでいきたい。 部活動体験を担当する専門部会は、小学校が主担当であったがスムーズな運営を考えると、部活動を実施している中学校に主担当をお願いした方が良いと思うので、来年度以降改善していきたい。</p> <p>(委員)</p>

横島中ブロックでは今年度のPTA・育友会合同研修会を2回実施した。また、小学校の外国語活動では、中学校の英語の先生と小学校の担任によるティームティーチングを実施した。他に、各クラスの代表が夢などを発表する小・中学生の主張交流大会をスタートした。

(会長)

事務局からは今年度取り組みの総括、チーフコーディネーターを担当している委員からは個別具体的な今年度取り組みについての報告があったが、お聞きになった委員から質問等はないか？

(委員)

PTA・育友会合同研修会とは具体的にどのような取り組みを実施したのか？

(委員)

各学校の活動内容の交流を行った。

(2) 報告2 小中一貫校「宇治黄檗学園」の取り組み報告

宇治黄檗学園校長伊家委員より今年度4月に開校した宇治黄檗学園の取り組み報告

(委員)

開校から1年が経とうとしているが、たいへん長い1年間であったと感じている。本校の全教職員は、小中学校の兼務発令を受けており、この1年間は前期(小学1年生から小学4年生)、中期(小学5年生から中学1年生)の2つのステージを意識した取り組みを行ってきた(今年度は後期がない)。例えば学年主任会を前期、中期で実施し、各ステージの交流、調整を図った。児童生徒の取り組みとしては、体育大会や学習発表会を小中合同で実施した。これらの取り組みは試行錯誤の連続で、実施にはたいへんな困難を伴うものであった。

開校から1学期がたった時点で学校活動について総点検を行い、チャイムの鳴り方など、できるところから改善していった。また、中期できずな科を実施した。さらに、学校独自の学力診断テストを実施した。

1年間の所感として、基礎をしっかり学ばせることが重要と感じた。この基礎とは、学習というものの系統を意識することが最も大切だと考えている。これには教職員の自覚が重要であるが、本校は小学校と中学校が併設された小中一貫校であるため、日常的に教職員が小学校から中学校までの学習の系統を意識した指導ができることが、本校の優位性であると考えている。

毎年、アンケートを実施して比較しているが、年下に対して優しくするといった項目で好転がみられた。1年生から7年生(小学1年生から中学1年生)という幅広い年齢層が同じ建屋で学校活動を行っていることで、自分の将来像を身近に見ることができている。さらに、幅広い年齢層が同じ建屋で学校活動するということは、自分の過去を振り返ることにつながる。子どもたちが身近に自分の未来と過去を見ることができ、これも本校の優位性であると考えている。

本校の活動は地域の支えがあってのものと感じており、たいへん感謝しているところ

ろである。

最後になるが、他の学校で抱えている課題は、本校でも同じような課題を抱えている。本校の優位性を活かしながら課題解決を図っていきたい。

(委員)

系統を意識した学習とのお話であったが、中学校教職員が小学生の授業を受け持つ科目が限られているのはなぜか？全科目で実施すればよいのではないか？

(委員)

現在の人員体制では、人数的または教員免許上の限界がある。今後、これまで以上に中学校免許を持つ教職員の専門性を活かせる取り組みが大切だと考えているが、中学校免許を持つ教職員が小学生を教える乗り入れ授業の実施と、系統を意識した指導は別の問題かと思う。乗り入れ授業の実施如何に関わらず、教職員全員が系統を意識して児童生徒を指導していくことが重要である。

(委員)

体育大会などを小学1年生から中学1年生まで一緒に実施したとのことであるが、大きな体力差がある小学生と中学生と一緒に活動するというのはたいへんな御苦労だったと思う。工夫した点などがあれば伺いたい。

(委員)

おっしゃるとおり、これだけの年齢差がある子どもたちが同じ行事に参加するのは、非常に苦労が多く、これからも試行錯誤しながら取り組んでいくことになるかと思う。今年度、小中合同で行った取り組みについて、来年度も同じように全体で行うのか、または何らかの方法で児童生徒を分けて行うのかは検討中である。しかし、取り組みを分けて行うにしても、同じ建屋で一緒に学校活動を行っている子どもたちであり、それぞれの取り組みについて相互に参加することが可能な取り組みにできるようにしていきたい。

(委員)

中学生が小学生に対して指導している姿がイメージできない。中学生はどのようにして小学生とかかわっているのか？

(委員)

本校は小学校区と中学校区が同じ積み上げ式の学校であり、本校小学生がそのまま本校の中学生になる。中学1年生は、昨年度は小学6年生であり、中学生と小学生は顔見知りであることが多く、縦のつながりが強い。このため、中学生は小学生に対してたいへん優しく指導している。

(会長)

小中一貫校の強みと弱みがよく分かる報告であった。

(3) 報告3 小中一貫教育推進協議会の活動報告について

資料(1~2頁)に沿って事務局より説明

(会長)

情報共有したいので各委員から視察で感じたことを発表してほしい。

(委員)

木幡小学校での取り組みを視察した。音楽の授業では、小学生が中学校の教職員から授業を受ける際の嬉しそうな表情が印象に残っている。また、小学校、中学校の連携もスムーズだと思った。社会の授業では、中学校の先生の小学生への授業の教え方に遠慮があったように思えた。

(委員)

木幡小学校での取り組みを視察したが、子どもがいきいきと授業を受けていた。先生と子どもがやり取りしながら授業を進めていたのが印象的で、とてもいい取り組みだと思った。このような授業を通して、スムーズに中学校へ進学できるのかなと思った。

事後研究会にも参加したが、先生方のたいへん熱心な話し合いを聞いて、このように熱心に取り組んでいただいていることに安心感を覚えた。

(委員)

木幡小学校での取り組みを視察したが、エネルギッシュな授業に感心した。笠取など遠方の学校もあるので、チーフコーディネーターの先生の御苦勞はたいへんなものだった。

(会長)

御蔵山小学校での取り組みを視察した。中学校の先生の小学生への授業の教え方に遠慮があったとのことだが、これは実際にやってみて初めて分かることかと思う。小学校、中学校の教職員はそれぞれ、中学校の専門性や、小学校のきめ細やかさを交流の中で互いに深めていくことが大切だと思う。

(委員)

槇島中学校での取り組みを視察した。先生からの一方的な講義形式ではなく、先生と生徒がそれぞれ活発に発言していたが、中学校は講義形式の授業とのイメージがあったので驚いた。このような授業を見ると小学校と中学校の垣根がなくなっているように思えた。また、グループ討議を行っていたが、これも小学校と中学校の垣根をなくす効果があるように見え、すごく良い手法だと思った。

(副会長)

大久保小学校を視察した。中学生が小学生のために一生懸命頑張っていて、中学生の自尊感情の高まりを感じられた。小中一貫教育によって中学校で一番下の学年になる中学1年生にも、下の学年となる小学6年生ができることになる。これが小中一貫教育のメリットといえる。しかし、各学校が離れていることがネックとなるが、広野中ブロックでは教育課程を工夫して小中一貫教育に取り組んでいるとのこと非常に良い取り組みだと思った。

今回は小学1年生と中学1年生の交流であったが、小学校と中学校とのスムーズな接続においてポイントとなる学年である小学5、6年生と中学1年生との交流なども見たいと思った。

(4) 報告・協議4 宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告

宇治市小中一貫教育についてのアンケート報告書(以下アンケート報告書)に沿って報告

(事務局)

昨年6月～7月にかけて、全市立小学校の第4学年から第6学年及び全市立中学校の第1学年から第2学年の各学年からそれぞれ1クラスを抽出して、マークシート方式でアンケートを実施、回収率は児童生徒97.9%回収、保護者82.9%であった。今回のアンケートで、特にポイントとなる点について説明する。

児童生徒の設問1-1「授業はこれまで習ったことやこれから習うことにもふれて進められていると思う」の回答をみると、小学生から中学生になると肯定的回答の割合が明らかに減少し、中学1年生から中学2年生になるとさらに肯定的回答の割合が減少する。これは中1ギャップの表れかと考えられる。今後の小中一貫教育は、これら肯定的回答の減少を解消するように展開していく必要がある。

次に保護者のアンケート回答をみると、小中一貫教育のねらいに対してたいへん高い期待を示していることが分かる。しかし、設問1-5、1-7から、小中一貫教育の全面実施に伴う具体的な変化や成果は十分に見られないと認識していることが分かる。教育は一朝一夕には浸透しないが、今後各中学校ブロックで保護者理解を深めるために粘り強く取り組んでいくことが必要である。

(会長)

アンケート報告書について意見があれば伺いたい。

(委員)

アンケート報告書20頁の設問1-5から、小学生と比較して、中学生は先生が自分のことを理解していないと感じている割合が多いことが分かる。これは小学校では担任がほとんどの授業を受け持つために児童と接する時間が長いのに対し、中学校の授業では教科毎に先生が代わるので、担任と生徒が接する時間が短いためだと思う。

(会長)

このアンケート結果は、小中一貫教育を行っているから、この程度の落ち込みとなっているという解釈もあり得るかと思う。

(委員)

本アンケートの結果は経年で比較することが必要だと思う。

(5) 報告・協議5 次年度に向けて

(事務局)

次年度に向けては全市的な取り組みとして、広報活動について、今回のアンケートの結果を、広報紙・市ホームページに掲載して広く周知を図りたい。また、先方にご了解いただければ、連合育友会の会議にてアンケート結果についての説明を行いたいと考えている。また、コーディネーター会議やチーフコーディネーター会議を定期的で開催することで各中学校ブロックの交流を図りたい。また、進行管理は、本推進協

議会にお願いしているところだが、あわせて小中一貫教育についてのアンケートを来年度も実施する予定である。また、新規採用職員や小中一貫教育非常勤講師を対象に小中一貫教育に係る研修会の実施を予定している。

各中学校ブロックでの取り組みとしては、日々の活動に小中一貫教育の視点を取り込めないか検討してもらいたいと考えている。小中一貫でつなぎを意識した学習指導の推進には小学校、中学校の教員が連携して指導案を作成することが大切であると考えており、系統を意識した指導案づくりを促していきたい。

(会長)

来年度に向けての取り組みについてご意見を伺いたい。

(委員)

教育を受ける権利は平等であるが、環境面においては大きな格差がある。宇治黄檗学園のような立派な施設がある一方で、耐震化も終わっていない学校もある。将来的な対応ではなく、現時点での環境面の格差をしっかりと認識してもらいたい。

(会長)

教育において、環境を整えることも大切なことである。今後の整備計画等があれば事務局に伺いたい。

(事務局)

環境面を整える施設整備は計画的に進めることが重要である。来年度には市内全市立幼小中学校の耐震化工事は完成する。続いて空調工事の実施も予定しているところである。教育とは、施設を充実させるだけではなく、ソフト面の充実を図ることも重要だと考えている。

(会長)

小学校独自の領域と中学校独自の領域とがあるように思う。それぞれの独自性を尊重して、指導の系統を保つものなのか、それとも、もっと話し合っ小、中学校それぞれ独自性をすり合わせていって、指導の系統を作り出していくものなのか、ご意見があれば伺いたい。

(委員)

小学校は意味理解を大切にすることが多い。中学校では意味理解を前提とした指導を行うことが多い。小学校での意味理解を重視した丁寧な指導が、中学校で生きてくると思う。

(副会長)

理科の事例であるが、小学校では体験を重視し、事象を見て考える。中学校では、実際に事象を見るよりも頭の中で考える、つまり科学である。小学校と中学校とで理科という教科に対する在り方が異なるため、小学校から中学校まで、どのように子どもたちに科学する考え方や手順を教えていくかを系統的に指導していく必要がある。そして、どの教科においても理科の事例のように系統的な指導を考える必要がある。

先ほど、保護者は小中一貫教育の具体的な変化や成果が十分には見られないと認識しているとのアンケート報告があったが、設問1 - 5についての小学6年生保護者の

回答は、その前後の学年より肯定的回答の割合が高い。小学6年生はもっとも小中一貫教育の恩恵を受ける学年と言える。今後、アンケートを経年比較する中で、この小学6年生保護者の動向には注視する必要がある。

(会長)

来年度の視察予定を事務局に伺いたい。

(事務局)

来年度も各中学校ブロックで実施する小中一貫教育の取り組みについて視察を予定している。

(会長)

今年度は小中一貫教育全面実施1年目であるが、今年度1年間の総括を委員の皆さんからお願いしたい。

(委員)

本推進協議会は小中一貫教育の進行管理を担っているところである。最近の世間の風潮として、教育を数値化することが多いがよくない傾向だと思う。教育は教室で行われるものであり、数字で測ることができない。本推進協議会事務局はたいへんな御苦労をしながらエピソードを積み上げた資料を作成していただいております、たいへんありがたいと思っています。

(委員)

保護者が小中一貫教育を実感できないのは、小中一貫教育を目にする耳にする機会が少ないからだと思う。東宇治中ブロックでは各学校合同のPTA、育友会合同研修会を実施した。こういった取り組みが口コミで広がっていくことを期待しているし、学校が意図的に仕掛けていくことも大切だと考えている。

(委員)

槇島中ブロックでは独自にアンケートを実施している。このアンケートには小中一貫教育についての記述式の箇所があるが、この記述欄への記載がだんだんと増えてきており、小中一貫教育の浸透を感じているところである。

(委員)

今年度実施した保護者向けアンケートに、小中一貫教育に関する項目を入れたが、よく分からないとの回答が多かった。私は、学校だよりの作成も担当して、小中一貫教育についての記事をできるだけ掲載して情報発信してきたつもりだったので、この結果にはショックを受けた。日常的に様々な取り組みをしているのだが、保護者の目に触れる機会が少なかったのかと思う。

(委員)

北宇治中ブロックの教職員は、この小中一貫教育を、時を同じく、場所を同じく、思いを共有する、思いを可視化するような取り組みにしていきたいと考えている。小学校、中学校の教職員がそれぞれの思いをお互いに伝えて共有できる交流を実施しているところである。そして、最も大切なのが、我々、実際に小中一貫教育を進める教職員が、保護者等に対して、その思いを言葉で伝える力をつけていくことだと思う。

(委員)

小中一貫教育は1、2年で成果がでるものではない。長期的な取り組みをお願いしたい。

(委員)

小中一貫教育は、小学校と中学校がスムーズにつながるのが基本だと思う。

(委員)

自分自身としては小中一貫教育が着実に身につけているように思う。小中一貫教育の定着には時間をかけて進めていくことが重要なので、息を切らすことなく続けてほしい。

(委員)

同じブロック内の学校間で、同じブロックであるとの意識の高まることで小中一貫教育が進むかと思う。

(委員)

小中一貫教育を進めることでの一番の成果は先生同士の交流だと思う。子どもたちをスムーズに中学校に送り出したい、迎えたいという先生の意識の高さを感じるようになった。

(会長)

今回の会議では各委員からたいへん貴重な意見をいただいた。来年度はもっと本推進協議会の委員が学校現場を視察できるような機会をつくってもらえるとありがたい。また、安全で健康な学校活動のためにも限られた予算であるとは思いますが教育委員会の支援をお願いしたい。

3 閉会

・中谷教育部長より閉会の挨拶